

ニュー インターナショナルリスト

平等がもたらす効果



KEYNOTE

過去の不平等から学び より平等な未来へ

政治をめぐる状況は、現在とりわけ不透明に思えるかもしれない。しかし、一歩下がってもっと大きな構図で見ると、右派ポピュリストや新自由主義政策の台頭は一時的現象のように思える。経済的平等度が高ければ、富裕層、貧困層、そして中間層も含め、すべての社会のすべての人々が恩恵に授かれるという証拠が徐々に増えてきている。政治家も政策担当者も、この事実がひとたび広く理解されれば、それを考慮せざるを得なくなるだろうとダニー・ドーリングは解説する。

2008年までの30年間、米国や英国等いくつかの国々は、ほかに有効な手段がないとほぼ決めつけて、不平等が拡大するやり方を選んできた。一方、激しいグローバル化の中にあっても、他の多くの国々は別の道を歩み続けて平等度を高めていくことを選んだ。現在では、

経済的平等度の高い国々と低い国々における社会のあり方の違いを個別に見ていくことで、平等がもたらす効果を測ることができる。

平等がもたらす恩恵は、まるで魔法のようである。平等度が低い国々と比べると、高い国々の人々はおおむねより健康で幸せである。犯罪は少な目で、創造性や生産性はより高く、大体において学業成績も良い。経済的平等度が高い暮らしが有益であることについては、今や非常に多くの証拠が積み上がっており、それが世界中の政治や社会を変え始める日も遠くないかもしれない。

このことは、ホワイトハウスの子どもつぼいリアリティ番組司会者や欧州で台頭する右派ポピュリズムにしてみれば、信じ難いことだろう。だが、つい一世紀前には突飛な考えと思われた女性参政権や旧植民地の独立が今では実現しているように、この有益な平等効果も難なく受け入れられる時が来るだろう。より高い平等は、もはや「危険な考え」では

ない。経済的平等を目指した国々とそうでない国々で何が起きているのか、すでに証拠が示されているのだ。

だが、私たちは忘れやすい。そう遠くない昔、女性が投票することやすべての国が自由を得ることに對して激しく反対したことを、私たちは覚えているだろうか。私たちは、現在の自分たちの行いが後世の人々を嫌な気分させてしまわないか、自問することを怠ってしまいがちだ。

今月号のテーマ、そしてそのベースとなっている書籍（より包括的な説明がなされている）の基本的な趣旨は、人は経済的に平等であればあるほど健康で幸福である、ということだ。高い平等度は、幸福が広がることの十分条件ではないが必要な条件である。このことは、調査を通じて人類の長い歴史を掘り起こすとともに、世界中の統計情報も活用して証明される。

経済的平等度が高いということ

12 カ国における最富裕層 1%の収入が全収入に占める割合

国	最も古いデータ		最低値 *		最高値 *		最新値	
	年	割合	年	割合	年	割合	年	割合
米国	1913	17.96	1973	7.74	1928	19.60	2014	17.85
英国	1918	19.28	1978	5.72	1919	19.59	2012	12.70
カナダ	1920	14.40	1978	7.60	1938	18.41	2010	12.22
ドイツ	1900	18.63	1995	8.84	1917	22.42	2010	13.13
インド	1922	12.72	1981	4.39	1938	17.82	1999	8.95
スイス	1933	9.98	1983	8.39	1939	11.78	2010	10.63
フランス	1920	17.95	1983	6.99	1923	18.91	2012	8.94
日本	1900	16.25	1945	6.43	1938	19.92	2010	9.51
オランダ	1914	20.96	1993	5.24	1916	27.88	2012	6.33
フィンランド	1920	15.27	1983	3.49	1920	15.27	2009	7.46
スウェーデン	1903	26.99	1981	3.97	1916	28.04	2010	7.24
中国	1982	7.87	1983	7.70	2007	13.72	2010	12.22

* 過去のデータがある中で、最富裕層 1% が占める割合が最低あるいは最高の年とその割合。

出典：World Wealth and Income Database（2017年3月時点のデータ）

は、みな同じような仕事をし、同じような家族構成や住まいで暮らすということではない。どの学校も同じだったり、誰もがまったく同じ収入を得たりするというということでもない。それは、全ての人々が尊重され、その仕事や貢献が相応に報われ、必要とするものが与えられるということであり、お互いに尊重し合うということだ。金銭は相対的なものになる。不相応な報酬を得ている者たちがいれば、実際に罰を受けることになる。

平等とは、他者と同じ権利、尊厳、自由が付与されていることを意味する。平等には、物、情報、サービスなど、さまざまな資源を利用する権利、ひとりの人間としての尊厳、人生において何を成すかを他者と対等な立場で選ぶ自由が含まれる。すべての人々がこのような平等を授かるに値すると信じることで、より平等な機会の実現後には誰もが同じように行動するようになることと信じることは、まったく違うことだ。

左派や環境問題に熱心な政治家は、より高い平等を声高に訴え、右派やファシスト政治家は、それに反

対する傾向がある。しかし実のところ、平等にはいかなる政治的レッテルも張られていない。社会主義や共産主義に分類されるシステムの下では、高い不平等が維持され増大してきた。いくつかの自由市場システムの下では、平等が高まり、活躍の場がより対等になるのを経験した。無政府主義システムでは、高い平等か高い不平等かのどちらかになりうる。こういった社会システムは、法の下での支配という考え方が登場する前に存在していた。繁栄の概念が広がったのはその後である。それらの社会システムが、すべてとても平等だったとか、あるいはひどく不平等だったというわけではない。

さらなる不平等化へ

20世紀初め、富裕国のほとんどは同じ程度に不平等だった。そして20世紀半ばまでに同じ程度に平等になった。そのため、不平等と平等の度合いに何が具体的に関係したのか、突き止めるのは困難だった。しかし1970年代以降、富裕国はそれ

ぞれ異なる別の道を行っていったため、現在では経済的平等のさまざまな度合いがどう現れているのか数値化できるようになった。

米国内の不平等が過去最小になったのは、44年前の1973年だ。この時、米国の最富裕層 1%の収入は、全収入の 7.7%を占めるにすぎず、経済的平等度はすばらしく高くなった。上の表は、主要 12 カ国の不平等について、最も古いデータ、最新データ、参照可能な情報が残っている期間中の最高値と最低値を示している。

これらの数字は、とても重要である。なぜなら、その年に関係なく、不平等の度合いはさまざまであることを示すことに加え、同じ年でも富裕国間で大きな差があることを示しているからだ。このような表は、ひどい不平等は避けられないとの主張に対し、それが誤りだと指摘する際の証拠となる。

実際、今生きている人々にしてみれば、ほとんどどこの国でも今より平等だった時代の記憶があるだろう。米国に暮らす人々にとって

は、超大金持ちの収入が全収入合計の7.7%しかない世の中など想像し難いだろう。しかし、これはつい最近の1973年のことだ。それとは対照的に、オランダやフィンランドで不平等がもしそんなレベルに達したら、人々は卒倒するだろう。彼らはそれぞれ5%と3.5%あまりの最低値から上昇してしまった今、すでにショックを受けている。しかし、米国、英国、カナダの最新データは、それぞれ18%、13%、12%あまりだ。

1970年代、英国は米国より平等度が高い時期さえあったし、その最高記録も少し長く続いた。私は今よりずっと平等だった時代に英国で育った。1978年、私が10歳のころ、富裕層の金持ち度は最も控えめだった。最富裕層1%の収入は、総収入のわずか5.7%を占めるに過ぎなかった。その数字は、2007年までに15.4%にまで上昇した。10歳の頃からほぼ毎年のように、大金持ちはさらに大金持ちになり、そのすぐ下の金持ちが残りの分をどんどんたくさん取るようになっていった。このため、大多数の人々への分、とりわけ貧困層に残される分はますます少なくなり、困窮者数も増えていった。この表の心なしか冷徹に見える統計値は、不平等が容赦なく進んだ富裕国と、所得の不平等度を比較的低く抑えようとした国々両方の状況を示している。

もしもあなたがこの40年を米国かカナダか英国で暮らしていれば、周囲で起こったことを見ているだけで（つい最近までは）最も恵まれた人々がいつもさらに多くを手に入れてきたように見えただろう。そのため、彼らの仲間入りをするか、少なくとも彼らと同じように振る舞うようにしなければ、自分と子どもたちの人生は厳しいものになると思い込

んでいたかもしれない。

しかし、改めてこの表を見れば、不平等の継続的な拡大傾向はオランダ、スウェーデン、フランスでは同じ時期でもほとんど見られない。強欲と腐敗はどこにでもあるが、いくつかの国では他の国よりもうまくコントロールされているのだ。

世界中の富裕層の強欲

20世紀初め、世界中のほとんどのいたる所では、最富裕層1%の収入の割合は全個人の収入合計の10～30%に上っていた。中国では、最富裕層は封建的な地主階級から共産党幹部（およびその友人）へと変わり、インドでは昔の王様から地域の起業家（および腐敗しきった政治家）へと変わった。とはいえ、常にトップ1%は存在している。

20世紀の60年間、不平等はいたるところで急速に縮小した。最富裕層1%が占める収入の割合は、不平等の指標のひとつにすぎない。だが、富裕層と彼らの取り分、そしてその行動に着目するには良い指標である。不平等についてのおおざっぱな研究でさえ、真の問題は貧困層の怠惰さというよりも富裕層の強欲さにあるという結果を示している。現実に「最富裕層1%の取り分」は、他の不平等の指標と統計的に強い相関がある。しかし、これが最も注目値する指標のひとつである理由は、最富裕層が不均衡の発生に実際に影響をおよぼしてい

るからだ。人は、自分の状況を自分の下よりも少し上の層か最富裕層と比較する。不平等を研究する学者らは、従来の貧困層に着目するアプローチよりも、富裕層を主要な問題としてとらえて着目することの方がきわめて重要であると考え始めている。(1)

1980年までは、エリート層の取り分が10%になる国はほとんどなかった。21世紀の最初の10年が終わるころ、不平等は再び拡大した。しかしそれと同時に、各国における平等と不平等はかつて無いほど多様で幅広い状態が見られるようになった。世界的に見れば、私たちは全体としては新たな選択を行い、一部では不平等拡大の防止に勝利を収めているように見える。

頭に入れておくべき重要なことは、今でも世界の豊かな国のほとんどが、カナダ、米国、英国が最も平等だった状態かそれに準ずるレベルの平等度を享受していることだ。平

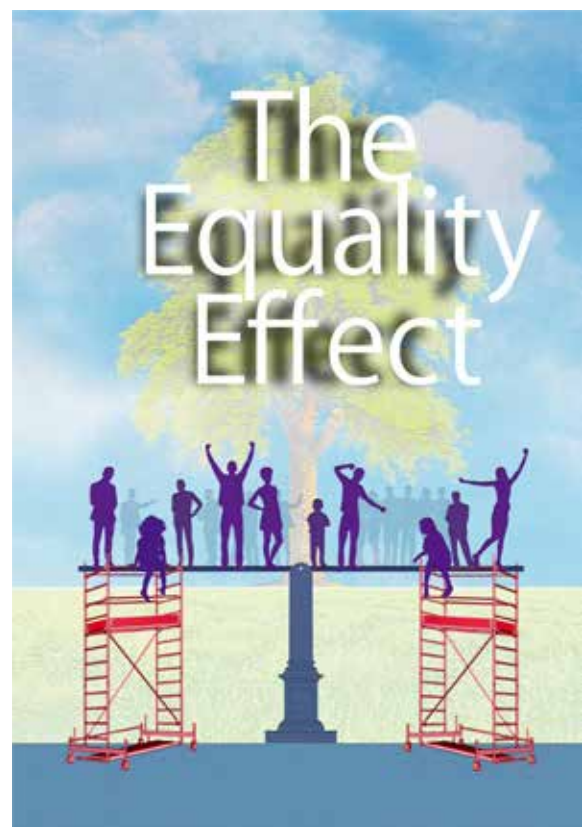


Illustration by Volker Straeter

等が広く行き渡っている時代と場所においては、他者を平等に扱うのはとても容易なことだ。これまでの浪費を帳消しにするために聖人のように振る舞う必要はない。より平等な社会の方が、行儀良く振る舞うことはずっと容易である。私たちは、このことを数百年前から知っており、平等に扱われる権利、健康で自由で幸福である権利に関する普遍的で有名な宣言にそれが見てとれる。

われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられているということ。

(米国独立宣言 1776年)

[訳注：上記訳はアメリカンセンター Japan より]

今日、米国下院のスタッフらは、平等度の向上で得られた主要な成果をウェブサイトで次のように記す。

「下院における最初のアフリカ系米国人議員は1870年に選出されました。最初のヒスパニック系議員は1877年、女性議員は1917年、アジア系米国人議員は1957年、女性のアフリカ系米国人議員は1969年です。2007年にはカリフォルニア州のナンシー・ペロシ議員が女性初の下院議長に選出されました」(2)

平等性の欠落が成果とみなされることはない。将来、2008年のバラク・オバマ当選がこのリストに追加されるだろう。このような観点では、ドナルド・トランプの当選は不朽のものとはなりそうもない。進歩は決してスムーズにはいかないが、進歩的でない人々は最悪の暴君にでもならない限りすぐに忘れ去られてしまうだろう。

たいていの場合、ひどい差別が認

識された後でないと高い平等度は達成されない。未来の平等主義者は過去を振り返り、私たちが子どもの権利になぜもっと十分に配慮しなかったのか疑問に思うかもしれない。これは、命が尽きようとしている人々、戦争捕虜、犯罪者、気が触れているとか無学だと考えられている人々、動物、自然の多様性、子孫と彼らのための居住可能な惑星など、配慮していないことを私たちが認識していないグループについても同様である。今すぐに行動を起こせば、将来の世代は私たちのことを、変化の時代にあってその変化を後押しした世代と見なすだろう。多くの事柄は後で振り返ってみるとよく分かる。しかし現時点で、より平等であることの利点について知っていれば、今何のために努力すべきかはすでに明白なのである。

富と貧困の固定化

不平等な国に住む不幸を抱えながら豊かな世界に暮らす幸運も享受している私たちにとって、失われてし

まった素晴らしい平等と生活を変えてしまった多数の選択肢を認識するには、1980年代以前を振り返る必要がある。米国人がより平等であった時代の米国に住むということがどういうことだったのか、それを思い出すためにはかなりの努力が必要だ。もっと平等だった時代には、愛する人との結婚生活を維持し、好きな仕事を見つけ、親世代よりも学歴を積むことは容易なことだった。これは、英国においても同様だったが、英国も今では米国と同じくらい不平等になり、2011年から2015年には英国国民は何百億にも上る公共部門の予算削減を経験し、特に貧しい人々は大きな打撃を受けた。予算削減計画の多くはまだ実施されていないため、今後もさらなる削減が行われる。

そして2016年、英国では僅差で欧州連合(EU)離脱への投票が上回り、米国ではトランプ大統領の投票者数は過半数に届かなかった[訳注：BBCによれば、得票率はトランプ46%、クリントン48%だった]。どちらの出来事も、非常に大きな経



世界最大の経済大国における貧しい賃金。2017年5月にシカゴで行われた最低賃金値上げを訴えるデモ。料理人、レジ係、その他の最低賃金労働者らが参加。

済的不平等と強く関連づけられた上であちこちで報道された。大きな経済的不平等が、男女間で、あるいは人種間や社会階層間で大きな不平等を作り出していることは明らかである。(3) そして、無数のその他のレベルの抑圧は、持たざる者の存在によって明白だ。ヴィト・ラテルツァは次のように述べる。

「トランプの勝利とブレグジット(英国のEU離脱)への投票について、中途半端で偏見の入り交じったデータ分析をもとにして、財産や権利を奪われた白人の労働者階級の反抗であると単純に見立てて取り上げるのであれば、私たちがたどり着く解決策は彼らに対する明確で徹底的な代替案になるのではなく、むしろさまざまな形で白人ナショナリズムと外国人嫌いの連合体を強化するものになる。無数の部分にわたる差別と抑圧が埋め込まれたシステム全体に、注意を向けるようにしなければならない」(4)

米国では、白人世帯と黒人あるいはヒスパニック系世帯の間で富の不平等が最近急速に拡大している。この不平等の拡大は、2008年の経済危機以前から始まっていたが、その経済危機によってひどく悪化した。左にあるふたつのグラフのうち上のグラフは、2009年に平均的な白人世帯が平均的な黒人世帯の19倍豊かであることを示している。

米国の黒人世帯のすべての資産を平均すると、2009年では1世帯あたりわずか5,677ドルとなるが、その4年前は1万2,124ドルであった。住宅市場の崩壊は、特に黒人世帯に厳しいものとなったが、ヒスパニック系世帯も同様に影響を受け、1世帯当たりの資産の平均は2005年の1万8,359ドルから2009年にはたったの6,325ドルとなった。これらは、

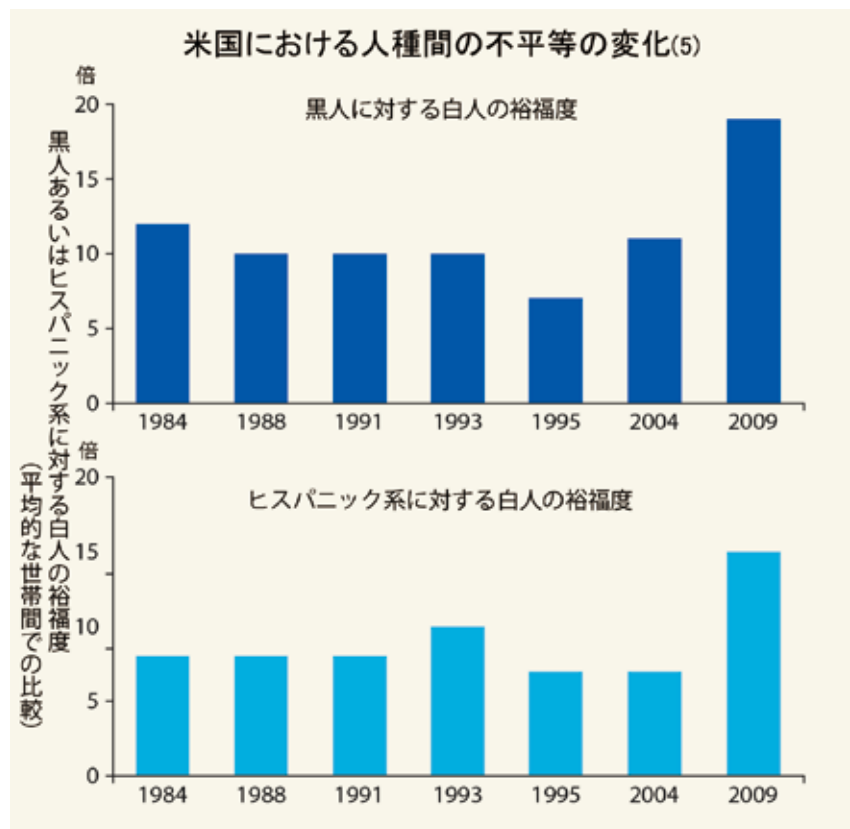
もともと資産が少なめの数百万人という人々に降って湧いた短期間での大きな減少である。

これとは対照的に、米国の平均的な白人世帯の資産の平均は、2005年の13万4,992ドルから2009年には11万3,149ドルに減少した。ほとんどの白人世帯はそれほど豊かではないが、平均をとると少数の大金持ちの存在によって平均額は上がってしまう。しかし、白人の中央値の世帯を見ても、黒人やヒスパニック系の中央値の世帯よりもずっと金持ちである。(6) 世界で最も豊かな国を自認する米国において資産が少ないことは、特に自尊心を傷つけられるだろう。

「アメリカンドリーム」は、どんなに貧しい人でも金持ちになれるという社会的流動性(あるいは社会的流動性)がその根底にある。だが、世界中で最も不平等なレベルにある富裕国では、どの国でも社会的流動性はきわめて低い。そこでは、子

どもの将来の収入は、まさに親の収入に左右される。その理由は簡単だ。豊かな親を持つ子どもは、そのスタート地点で有利に立っているのだ。親は、資金が豊富な学校に子どもを通わせるよう考えるだろう。あるいは、極度の貧困に暮らす子どもたちが少なく、教える教師たちの負担が低くなる地域に住むようにするだろう。また、このような経済的に不平等な社会は、社会的な分断もずっと大きい。

これとは対照的に、経済的に平等な国では社会的流動性が高い。それは、子どもたちが同じレベルの社会的資源を利用することができるからだ。子どもたちは同じレベルの学校へ行き、同程度の教育機会を与えられ、将来的なキャリアの選択肢も幅広くなることが多い。収入が非常に高い、あるいは非常に低い仕事に就くことになる人は少ない。そして、経済的により平等な国々は、社会的な分断も少ない。個人がどの所得階



成長は、すべての人々に恩恵をもたらすのか？

Cartoon by Ella Furness



層に属するののかということに対する不安が低いと、子どもたちが誰と交流を持つのか、どんなキャリアを選ぶのか、といった親の心配がより少ないのである。そのような社会では、金持ちや貧乏といってもその程度はあまり極端なものではない。そのため、誰もが自分の心の奥の叫びに自由に従えるのである。

変わり始めた時代の流れ

今日、右派政治家でさえも経済的平等度を高めたいと言うことがある。彼らは時々、経済的に「取り残されている」人々に対する懸念を示すが、選挙の票目当てではないという証拠を示すのは難しい。しかし実は、彼らの訴え方が変わってきていることは、私たちの共通認識の変化がより拡大していることを示している。彼らの前任者は、すべての人への恩恵になるだろうとして（しかし実際にはならない）、「能力に応じた報酬」「成長はすべての人々を救う」「大当たりする成功者を許容する」といったことを口にした。今では、不平等拡大に加担する者であっても、自分たちはそれに反対していると主張する。だが、彼らが不平等の保持と拡大に共謀していることについては認めていない。

世の流れは、より大きな経済的平等に向かっていくのかもしれないが、そのような事例をもっと明らかにする必要があるだろう。そうしなければ、右派がこの議論をひっくり

返すかもしれない。彼らは不平等に反対すると主張するだろうが、一方ではそれは別の物に同じレettelを貼って素早く後押ししてくるだろう。

より高い平等度とは、収入と富の不平等の流れに単にあらが

うだけというものではない。より高い平等度は、無視できない有益な効果を社会にもたらす。私たちはこれを「平等効果」と呼んでいる。より高い経済的平等は、私たちがのおろかさや臆病さを減少させ、暮らしに対する満足度を増大させる。このことはもっと大きな恩恵をもたらすかもしれないが、それは定かではない。なぜなら、私たちはあまりにも長きにわたりひどい不平等を容認してきたため、経済的に尊重しながらお互いをもてなし合った時にどんなことが可能になるのか確かなことは分からないのである。

この有益な平等効果の証拠は、現在非常にたくさん存在する。しかしそのメッセージは、ほとんどの政治家や彼らが応えるべき多くの有権者には届いていない。そのメッセージをきちんとあらゆる方面に届けるのは、私たち全員の役目なのだ。◆

- (1) See, eg, Susan George, *Whose crisis, whose future?* Polity, 2010. (2) On the House of Representatives website, see: <http://house.gov/content/learn/history> (3) K Geier, *The Nation*, 11 Nov 2016, <http://bit.ly/2kx5mVY> (4) Vito Laterza's Blog, 10 Nov 2016, <http://nin.tl/Trumpmyth> (5) For 2009: Pew Research Center tabulations of income survey and program participation data from the 2008 panel; for 1984-2004: various US Census Bureau reports including Current Population Reports. 6 R Kochhar, R Fry and P Taylor, Pew Centre Research, 26 July 2011, <http://nin.tl/oDIVYp>

(NI504 p10-15 The Equality Effect の翻訳)

翻訳協力：齊藤孝子／平野千鶴子

.....
 ● ボランティア翻訳者募集中 ●
 ● New Internationalist の記事の翻訳を通じ、NI ●
 ● ジャパンの情報発信活動をお手伝いいただけ ●
 ● るボランティアの方を募集しています。資格 ●
 ● や経験は問いません。詳しくはNIジャパン ●
 ● ログをご覧ください。 ●
 ● <http://nijapan.blog.fc2.com/blog-entry-14.html> ●
 ●

NI JAPAN ニュー・インターナショナリスト日本版 2017年7/8月合併号 No.150 「平等がもたらす効果」

*今号は、New Internationalist No.504 July/August 2017 The equality effect からの翻訳です。
 *文中の通貨表記のドルや\$は、特にただし書きがない場合はUSドルを表しています。

ニュー・インターナショナリスト・ジャパン (有限会社 インティリンクス内)
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-42-7-301 電話 /FAX: 03-6873-5935 nij@ni-japan.com <http://www.ni-japan.com>

本誌の内容を法律の範囲を超えて無断で転載・複製することは、著作権の侵害となります。許諾についてはNIジャパンまでご連絡ください。
 ©New Internationalist Japan 2017